

二祖対面考

柴田 哲彦

二祖対面とは夢中において、善導と法然とが、五百年の時代を越え国を越えて対面し、法然が善導に直々に教示を受け、それをもとに回心し、浄土宗を開宗したと伝えられることがらである。

この夢中における善導法然二祖の対面はその後の法然の門流に大きな影響を及ぼし、特に浄土宗伝法の上では聖岡の『五重指南目録』に半金色の伝として銘記されるごとく、現在の結縁化他五重に至るまで、夢の中の善導が下半身金色であつた、ということとともに浄土宗伝法の上において重要な意味を与えられている。

さてこの二祖対面の根拠をなす資料には法然の伝記資料と及び独自の資料とがある。伝記資料としては「四十八巻伝」「源空聖人私日記」「醍醐本」「四巻伝」「弘願本」「琳阿本」「古徳伝」「九巻伝」「十巻伝」「十六門記」等数多く見られ、又二祖対面のみを記載したものとして『拾遺語灯録』所収の「夢感聖相記」及び和語で記された『西方指南抄』所収の

「法然聖人御夢想記」の二つがある。二祖対面の内容は、夢の中で法然が山の麓を歩いているとき、上半身が黒、下半身が金色の姿をもつた善導があらわれ、両者の対面がなされたということ、諸伝記ともほぼ同様の内容である。したがって、これら一連の記述の原型ともいふべきもの存在が予想されるが、一応これらの原型として『拾遺語灯録』所収の「夢感聖相記」と『西方指南抄』所収の「法然聖人御夢想記」および『源空聖人私日記』がそうではないかとみなされている。この三部の中でとりわけ法然の伝記に与えた影響の大きなものは「夢感聖相記」と「法然聖人御夢想記」とであることは疑いない。『四十八巻伝』に見られる記述は「法然聖人御夢想記」とほぼ同様であり、さらにそれは「夢感聖相記」と漢語と和語との相違はあるが、これまた、おおむね一致している。つまり漢語の「夢感聖相記」と和語の「法然聖人御夢想記」は表現の語体は異なるが両者はほぼ同一の系統と考えられる。

このように「夢感聖相記」「法然聖人御夢想記」を根拠として伝えられた二祖対面という事象は通常、法然在世中の事実にもとづくものとされているが、しかしそれに対しての疑義もある。即ち

(一)、法然の他のいずれの法語にも善導との夢中対面を語っていない。

(二)、選択集に同じく対面のことが記載されていない。⁽³⁾

以上の二点に集約されるような理由でもつて二祖対面は法然在世中におこった事実ではなく、貞慶の『興福寺奏状』に主張される法然は師資相承の血脈もなく私に立教開宗を号したとする論難に対して、法然滅後、比較的早い時期にこの二祖対面の説が法然門下によつてつくられ、旧仏教側の反論に対して教団の正統性を主張した。とする説もある。⁽⁴⁾ 以上のことがらをふまえた上で二祖対面を考察しなければならぬ。

法然が浄土宗を開宗する以前、即ち鎌倉仏教と称される一連の新仏教が台頭する以前までの旧仏教において、一宗としての立教開宗をなす場合の公式的な規定は見当らない。しかし貞慶の『興福寺奏状』などの内容から堆論すると

(一) 伝灯の大祖（外国僧の来授・我国高僧の往受）

(二) 師資相承

(三) 教の優位を示めす判釈

(四) 勅許

二祖対面考（柴田）

(五) 教団組織

以上五の条件を満足しなければならなかったとされている。⁽⁵⁾ 以上を立教開宗の必要条件として、法然の開宗を見ると、伝灯の大祖からの直接的な師資相承と、勅許とが欠けている。生死出離を求める目的を持つて黒谷に隠遁までした法然にとつて、世俗的な勅許など必要としないことは容易に理解し得るところであるが、宗教的な意味を持つ伝灯の祖からの直接的な法の相承をどのように考えていたのであろうか。

文治六年法然の東大寺における講説によつて成つた「阿弥陀経釈」に

爰於「善導和尚往生浄土宗」者、雖有「経論」、無「人」於習学、雖有「三疏釈」、無「論」讚仰、然則無有「相承血脉法」、非「面授口決儀」と記すを見ても、通常考えられるような意味での「面授口決がないことは認めていることがわかるしたがつて、これについて、「歴史的師資相承無き事実を述べ給ふた」という認識が生じること無理からぬことである。しかし同時に法然自身、面授口決の師資相承に対して意識ないしは関心があつたことも知ることができる。

さて論ずるまでもなく法然が専修念仏帰入に至るまで、さらにそれ以後において善導より受けた影響ははかり知れないものである。「選択集」に

善導和尚偏以「浄土」為「宗」、而不下以「聖道」為「宗」、故偏依「善導

一師^一也^二

と記すごとく、終始一貫して自身の依りどころを善導に求める姿勢は不変であり強固である。そしてさらにこの態度が、やがて善導をして「弥陀の化身^⑧」とまで昇華してゆくことは当然の帰結といえよう。したがって「弥陀の化身」善導によつて著された『観経疏』に対する法然の態度は「善導、観経疏者は西方指南行者、目足也^⑩」と示めすごとく法然の専修念仏思想をささえる基盤であることは言をまたない。その『観経疏』に善導の言として

毎夜夢中常有^ニ一僧^一而來指^ヲ授^シ玄義科文^⑪

と記されこの『観経疏』は毎夜高僧が来現しその指示によつて善導が著したものであることを述べているが、法然は『選択集』でこのことをとり上げ

僧者恐^レ是^ハ弥陀^ノ応現^ニ爾^ノ者^ヲ可^レ謂^フ此^ハ疏^ハ是^ハ弥陀^ノ伝説^⑫

と述べ、法然の所依の論疏『観経疏』も夢中に弥陀より善導に相承された教説であるとの確信を持つていたことがわかる。したがって善導の『観経疏』を所依の論疏として専修念仏に帰入し得た法然にとつて、再び夢中における善導との対面に対する期待から更に確信にまで発展してゆくのはごく自然である。したがって法然の内証の世界においては、弥陀——善導——法然と次第される師資相承が確信され、それとともに善導に対する法然の日常的思慕の念の高まりから、

夢中における両者の対面は当然視されてしかるべきである。

このような夢中における善導との対面は、法然が面授口決による師資相承を意識する事実から結びついていったことが考えられるなぜならば、それは法然の固有の性格に負うところが多分にあると思われるからである。例せば『浄土三部経』を選定するに際しても、既定の実例である『法華三部経』『大日三部経』『鎮護国家三部経』『弥勒三部経』を紹介し、その先例にのつとつて『浄土三部経』の選定が従来の常識から逸脱したものでないことを示めしていることや、血脈につ

いても
如^シ聖道家^ノ血脈^ハ、浄土宗^ニ亦有^ル血脈^⑬

と記し、旧来の先例を重視する傾向が極めて濃厚である元久元年（二〇四）元久の法難に法然によつて執筆されたとする『送山門起請文』に

凝^シ信心^ヲ於^テ玉泉^ノ之流^ハ、致^シ渴仰^ヲ於^テ銀池^ノ之風^ハ、旧執猶存^⑭

と彼自身述べるごとく永年比叡山で培われた法然の物事に対する考え方は旧執として彼の生涯をつらぬく基本的な性格であつたと思われる。

このような性格を有する法然にとつて面授口決のない立教開宗は有り得ない。二祖対面についての記録が上述の資料以外の法語類または『選択集』に記載されないことだけを理由とする二祖対面門下成立説は今一度再考しなければならな

い。たとえ夢中の対面についての記載が『選択集』等に見出せなくとも、法然自身のある意味で保守的と称すべき性格により、面授口決による師資相承を重視し、これが夢中における二祖対面と結びつき内証の世界における専修念仏開立に重要な関連を持ったものと考えるのである。

- 1 『浄土伝灯輯要』六三頁
- 2 田村円澄『法然上人伝の研究』二四八頁
- 3 右同二五一頁参照
- 4 右同二五一頁参照
- 5 阿川文正『浄土宗伝法史の研究』『仏教文化研究』16・一三頁
- 6 石井教道『法然上人全集』一四五
- 7 頁林彦明『三巻七書』解題一頁
- 8 土川本『選択集』一二六頁
- 9 右同一三三頁
- 10 右同一三三頁
- 11 浄全二・七二頁
- 12 土川本『選択集』一三二頁
- 13 右同六頁
- 14 右同一〇頁
- 15 石井教道『法然上人全集』七九五頁

寄稿されなかった諸氏の発表題目(三)

韓国仏教における『金剛般若経』の位置(吳光燦) 撰論宗の展開と大論衆(里道徳雄) 法身有色説について(吉津宜英) 天台における秘密と密教(三崎良周) 天台智顗の佛身観(多田孝正) 智顗の三種教相と三種止観(鷲阪宗演) 大智度論と曇鸞浄土教(福原亮巖) 初期天台の禅思想(下)——慧思の禅法——(大野栄人) 善導大師と『観経』(三枝樹隆善) 観無量寿経における業思想(水尾現誠) 不空三蔵の教学(向井隆健) 新羅仏教戒律の特性(蔡澤洙) 龍樹所用の大無量寿経について(色井秀謨) 善導教学における往生の主体について(深貝慈孝) 『出三蔵記集』詮名録の資料について(内藤龍雄) 嘉祥の法華思想(富沢慶栄) 観経疏に於ける観仏と念仏の問題(正木晴彦) 大乘止観法門における如来蔵説(柏木弘雄) 華嚴経礼懺儀の特色と撰者について(塩入良道) 『頓悟大乘正理決』と頓悟思想(小畠宏允) 明教契嵩の書簡(安藤智信) 南泉禅の一面(平野宗浄) 六祖恵能の伝記に関する資料(中川孝) 経律異相の一研究——地獄部所引經典を中心として——(大内文雄) 慈恩大師説『勝鬘経述記』について(稻垣淳造) 詩僧少微について(河内昭円) 如来蔵思想の中国的展開(石橋真誠) トウルファンの仏教——とくに『涅槃経』の思想の伝播の实情を中心として——(佐藤心岳)

(二九七頁につづく)